The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス人民党　最後の日々
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2015, 65(2), p. 16-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス人民党　最後の日々

竹　岡　敬　温†

1. 亡命

フランス人民党の幹部たちと，党活動に深く身を投じていた党員たちとかれらの家族を運ぶ輸送隊が，東方に向かって出発したのは，1944年8月17日の早朝であった。なにも慌てることはないとおもっていたドリオは，出発を延ばしていたのだが，16日夕方，ドイツ国防軍最高司令部から撤退の命令が出たのである。ドイツ軍のトラック，サン・ドニ市役所の車両，レジスタンス活動と見せかけて土壇場に「徴発した」中央市場のトラック，個人の自動車などなど，雑多な輸送手段で構成された輸送隊が，1,500人から2,000人ばかりの人間を運んでいった。空襲の場合の被害を小さくするためにいくつもの隊列に分けられた輸送隊は，シャロン・シュル・マルヌ（マルヌ県），ついでサン・ディジエ（オート・マルヌ県）でいくつかの学校に分かれて宿泊し，最後に8月19日，集結地のナンシーに無事にたどり着き，しばらくのあいだ，そこで落ち着くつもりであった。

東方への脱出は，パニックも恐慌もともなわず，整然とおこなわれた。ドリオとその仲間たちにとっては，戦いはなお続いていて，東方への撤収はその戦術的過程のひとつにすぎなかった。かれらは，最後まで，共産党がフランスの政権を奪い取ろうとし，その結果，内戦が起こり，そのために，フランス人民党や対独協力主義者を含むすべての反共産主義者が，ついには同じ陣営に結束するであろうと確信していた。西欧諸列強とソヴィエト・ロシアとの同盟はそんなに長くは続かず，前者は，いずれ，「反ボルシェヴィズム」のドイツと和平交渉を開始し，そのときには，長いあいだ待ち望まれていた「全面的決着」の時代が始まるであろうと，かれらは考えていた[1)]。このような分析は，かならずしもまったく馬鹿げたものではなかったとしても，しかし，それは恐ろしく偏っていて，全体としてまちがっていたといわなければならなかった。ドリオたちは，かれらの願望にとって都合のよい面からしか現実を読み取ろうとはしなかったのである。とはいっても，かれらがそれ以外の希望にすがることはできたであろうか。かれらの目には，ドイツはどうあっても戦争に負けてはならなかったし，負けるはずはなかった。ドイツによる恐るべき秘密兵器の完成が間近かであるという噂が，なお数か月のあいだ，かれらに気違いじみた幻想を抱かせつづけていた[2)]。

ドリオは，フランス人民党の撤収部隊のなかにはいなかった。かれは，ル・カンとキャノビオを伴って8月19日にパリを去り，直接，アルザスの北，ドイツのパラティナート地方の小さな都市ノイシュタートに，かれの友人でナチスの大管区長官ヨーゼフ・ビュルケルを訪ねた。ドリオとビュルケルとの2人のあいだで，どうして個人的な政治的接触が確立されえたのか，それを完全にあきらかにすることはできな

---

† 大阪大学名誉教授

1) Dieter Wolf, *Doriot. Du communisme à la collaboration*, Arthème Fayard, Paris, 1969, p.409, 平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成　人民戦線とドリオ運動』風媒社, 1972年, p.392.

2) Jean-Paul Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, Balland, Paris, pp.461-462.

いが，ビュルケルは，2人のあいだに顕著な類似点が存在し，ドリオが，かれ同様，貧しく身分の低い家庭に生まれ，かつては革命的社会主義の生え抜きの信奉者であり，腕一本で身を立て，労働者階級の扇動家として成功し，過激主義と太っ腹で自由な振舞いとで知られ，上等のワインと美食の愛好家でもあることに無関心ではいられなかったのかもしれない[3]。なんらかの政治的利害関係もはたらいたにちがいないが，ビュルケルは，パリからの輸送隊であれ，いずれの地方からきた小グループであれ，ナンシーに到着した数千人のフランス人民党の党員たちの避難所を，かれの勢力圏であるパラティナート地方に提供することを承諾した[4]。ドリオは，すぐさま，ヴィクトル・バルテレミーと執行部の指揮下整然と組織され，ナンシーを仮の都としていたかれの仲間たちに，この朗報を届けた。フランス人民党以外の対独協力主義の政党のメンバーは，事実上，散り散りに分散していて，パリにとどまるものもあれば，それぞれ自分勝手に，東方へ逃れるものもあった。国家人民連合の指導者マルセル・デアも慌てふためいていた。この難局において，フランス人民党は「力，団結，権威と党首を守りつづけた唯一の組織であった」（ジャン・エロルド・パキ[5]）。

パリは1944年8月25日に連合国軍の手に落ち，ドイツ軍は西部戦線全域で後退し，ド・ゴール将軍の政権掌握が間近に迫っていた。さしあたって，ドイツ占領軍にも対独協力主義者たちにも，この後，フランス政府がいかなる形態をとるべきかという問題が提起されていた。実際，1944年8月20日にペタンがドイツ占領軍によって無理矢理にベルフォールへ連れていかれて以来，もはやヴィシー政府は存在しなくなっていたからである。ペタンは，そのとき以来，みずからをドイツの捕虜とみなし，いっさいの政治活動を拒否した。ラヴァルについても同様であったが，しかしながら，かれは，一定の行動の自由を確保しようとして，辞職まではしなかった[6]。かれは，ベルフォールで，首相の称号のままでペタンを迎え，ペタンに，ドイツに支援された政府が対独協力主義の極右過激派，とりわけドリオ，ド・ブリノン，ダルナンたちによって構成されようとしていると警告した[7]。

実際には，事態はそれほど単純ではなかったが，しかし，フランス政府の再建という問題を解決するために，ドイツ外相のリッベントロープが，ヒトラーの総司令部があった東プロイセンのラステンブルク近くのシュタインオルト城に，ラヴァルとデアだけでなく，ドリオ，ド・ブリノン，ダルナンの3人をも召喚したことは，事実であった。ラヴァルは召喚を辞退したので，かれの代わりに——しかし，たんに「情報提供者」の資格で——フランス政府建て直しの会談に参加したのは，マリヨンであった。最初はデア，ダルナン，マリヨンをスイスのフリブールまで飛行機が迎えにくる予定であったが，結局，飛行機は来ず，3人は鉄道での長旅に耐えなければならなかった。その途中で，病みあがりのド・ブリノンがかれらに合流したようであり，4人は8月27日にベルリンに着いた。「ベルリンを車で通り抜けたが，まるでゴーストタウンのような異常な光景であった。ほとんど焼け崩れた家屋の残骸が，果てしなく広がっていた」とデアがその『日記』のなかで書きとめている[8]。8月28日にようやく，かれ

3) D. Wolf, *op. cit*., p. 396, 平瀬・吉田訳, p. 382; J-P. Brunet, *ibid*., p. 462.

4) D. Wolf, *ibid*., p. 397, 平瀬・吉田訳, p. 363; Victor Barthélemy, *Du communisme au fascisme. L'histoire d'un engagement politique*, Albin Michel, Paris, 1978, p. 424.

5) Jean Hérold-Paquis, *Des illusions…Désillusions. Mémoires de Jean Hérold-Paquis, 15 août 1944-15 août 1945*, Bourgoin éd., 1984, p. 30; J-P. Brunet, *ibid*., p. 462.

6) V. Barthélemy, *op. cit*., p. 423.

7) Herbert Lottman, *Pétain*, Editions du Seuil, Paris, 1984, pp. 524-525.

8) *Journal de Marcel Déat*, 27 août 1944.

らはラステンブルクに着き，そこで4人はリッベントロープの用意した特別列車のなかに泊められた。そのなかで，かれらは，リッベントロープによって，個別に，あるいはサブグループ別に呼び出されるのを待ったのである。かれらは，また，アベッツから，ドリオが翌日の朝，飛行機で，ビュルケルとともに着くが，列車のなかでは泊まらないことを知らされた。

8月28日晩，ド・ブリノン，ついでダルナン，最後にデアとマリヨンがつぎつぎとリッベントロープのもとに呼ばれた[9]。4人の意見が完全に一致していたわけではないが，しかし，かれらは，すべて，亡命政府のもっていた権力をドリオがほんのすこしでも掴むのをできるかぎり妨げようとしていた。かれらは，長時間打ち合わせて，たがいの意見を一致させ，また，同様な気持をもっていたアベッツとも話し合っていた。リッベントロープは，最初に呼んだド・ブリノンに，政府にはドリオ，ダルナン，デアを，そしてド・ブリノン自身をも入れるようにすべきだと頑なに指示した。ド・ブリノンは，最初は柔らかな言葉で，つぎにはもっとはっきりと，ドリオがかつて共産党に所属していたことを強調し，その事実はペタンも気に入らず，そのためにフランス国民のあいだでも評判が悪いが，それにもかかわらず，ドリオは自分から新政府の首相の座を要求しているらしいといって，ドリオの入閣を妨害しようとした。しかし，リッベントロープは，何度もドリオの名前をあげた。どうやら，ドリオはかれの信頼をえているようであった。つづいてダルナンが意見を聞かれ，かれは，行政機関の役人や，かれの指揮下にある民兵隊員たちも，「非合法な」政府，すなわちペタンが同意しない政府に従うのを拒否するであろうと強調した。ペタンは，かつてアフリカでアブデル・クリムに味方してフランス人部隊と戦ったドリオを許すことができないであろうというのが，ド・ブリノンやダルナンがあげるドリオ入閣の反対理由であった。最後に，デアとマリヨンがド・ブリノンの主張を支持すると明言し，政府の「合法性」の必要を力説した。

翌日の8月29日は，1日すべてがドリオのために取っておかれていた。この日の最初の会談には，ビュルケルが同席し，アベッツも会話の途中で口を挟んだが，ドリオは，「1916年に，サン・ドニで地方の共産党に」加入して以来のかれの政治的人生について，長々としゃべったのち，新しい政府を構成するには，もはやペタン元帥やラヴァルでは駄目だといった。ビュルケルは，ド・ゴールが，「合法性」を通さずに，政府の指導者のポストにたどり着いたことを指摘し，その事実は「合法性」の問題にはあまり重要な意味がないことを証明していると主張して，ドリオを支持した。ドリオとアベッツとのあいだで，ラヴァルのことで激しい口論が起こり，ドリオは，かれ自身は「最初から」ラヴァルのなかに裏切り者の性格を見抜いていたのに，アベッツがラヴァルの陰謀に味方したことを激しく非難した。

この日の2回目の会談は，ドリオとリッベントロープとのあいだで差し向かいでおこなわれた。リッベントロープは，フランス政府の構成の問題を現実的に解決しようとして，つぎのような2段階での解決策を提案した。まず，老元帥ペタンによって体現される「合法性」の原則を守るために，ド・ブリノンがドイツ軍占領地域にたいするヴィシー政府の代表の資格で「政府委員会」の指揮をとり，目下の業務を迅速に処理する。そのメンバーは，権限を委託された「委員」の資格しかもたない。つぎに，ダルナン，デア，マリヨンら，これまでの閣僚たち

[9] 以後の記述は，つぎの諸文献による。Henry Rousso, *Un château en Allemagne*, Ramsay, Paris, 1980, pp.80-102; 通訳パウル・シュミット（Paul Schmidt）の覚書き（Politisches Archiv des Auswärtigen Amt, Bonn, les traductions effectuées par les services de la Haute Cour de Justice, W350, bordereau 1021; D. Wolf, *op. cit.*, 平瀬・吉田訳, pp.384-390; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.463-468.

の多くが所属することになろう「政府委員会」は，「ドリオによって指揮された合法的で革命的な新しいフランス政府」を急速に樹立するために，ペタンに圧力をかけなければならない。ドリオは，その間，ラジオと集会による徹底した宣伝をおこない，かれの党の再編成を強化しながら，かれの政府を組織するために，軍事情勢が安定し，有利な環境が生み出されるのを待たなければならない。

しかし，2段階に引き延ばしたこのリッベントロープの解決策は，ドリオには気に入らなかった。ドリオは，念入りに用意したとおもわれるつぎのような一連の反対提案を提出した——すなわち，ドリオはただちに革命的な政府をつくる。その「合法性」は，新政府のなかに，ペタンによって任命され，いまも在職中の内閣の閣僚の大部分が存在しているという事実によって，すくなくとも部分的には確保されよう。フランス義勇軍団（LVF）など，ドイツ軍のなかで戦っているフランス兵を召還して，共通の指揮下に置き，かれらの力を借りて，新政府はマキにたいする精力的な戦いを開始する。労働者のための社会的施策を採用し，反ボルシェヴィズムの宣伝と同時に「植民地の保全（フランスの全植民地の返還）を含む国土の一体性（ノール県とパ・ド・カレー県のフランスへの返還，ただし，アルザス＝ロレーヌ問題を除く）に基礎を置いた全国的な宣伝活動」を組織する。

これにたいして，リッベントロープはフランスの「未来の運命」について約束することは拒否したが，それでも，つぎのような3つの指示をドリオにあたえた。(1) アルザス＝ロレーヌは，ドイツ領としてとどまる（ドリオはリッベントロープに，それで問題はないと答えた）。(2) 北フランスの2つの県については，可能であれば，ドリオが指し示した方向で検討される。(3) フランスの植民地は切り取られることはない。

これにたいして，すこしのちに，ヴィクトル・バルテレミーが，このときの会談についてドリオから聞いた詳細な報告を再現しようとして，つぎのように書いている。「ドリオ内閣が組閣されたときには，ロレーヌ地方を含む国土全体と植民地全体をフランスに保障する，ドイツ政府の公式声明が発表されるであろうことが了解された。アルザス問題だけが戦争が終わるときまで保留され，戦争終結後，住民投票によって決定されるであろう[10]。」このように，領土問題については，ドリオとバルテレミーとの証言はかなり食いちがっている。おそらく，どちらかが嘘をついているのであろう。

ドイツ軍の制服を着て戦っているフランス義勇軍団（LVF）の帰国問題については，リッベントロープはかれの権限外であるとした。また，亡命フランス政府の構成についてのドリオの提案にたいしては，リッベントロープは，最終的には，ド・ブリノンを委員長とする革命的政府を即時樹立し，ドリオは副委員長と内相，場合によっては国防相のポストを占めるという一時的解決案を提示した。「ちょっと考えたのち，ドリオは，自分の入閣は首相として以外はありえないと反論して，この案を拒否した」と，このときのリッベントロープとドリオとの会談の通訳をつとめたパウル・シュミットは書きとめている。そして，シュミットは，つづけて，「もしかれの提案（ドリオ政府の即時樹立）が採りあげられないならば，かれはリッベントロープが最初に提示した案を選ぶとのべた」と記している。こうして，リッベントロープとドリオの意見はようやく一致し，ド・ブリノン，ダルナン，デア，マリヨンたちにドリオ政府の原則を受諾させるよう努めるが，もしそれが成功しなかったならば，ド・ブリノンを委員長とする暫定的な「政府委員会」の設立というリッベントロープ案に賛同するということになった。

---

[10] V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 431.

ドリオ以外の4人のフランス人は，列車のなかで待ちくたびれていた。前日の口論でまだドリオに腹を立てていたアベッツから，ドリオの案が優位に立ったらしいと列車のなかで聞いたかれらは落胆した。デアの日記によれば，ようやく8月31日昼すぎ，ふたたび，4人の男はシュタインオルト城に呼び出された[11]。

最初に呼ばれたのはド・ブリノンであり，ついでダルナンが呼ばれ，そのしばらく後にデアとマリヨンが続いた。4人のフランス人のスポークスマンをつとめていたド・ブリノンは，ふたたびドリオを激しく非難し，あらためてドリオの「政権掌握」に反対した。そして，ド・ブリノンがそのすぐ後に他の3人に報告したところでは，かれは，ドリオを首相ないし委員長にした政府の即時樹立という案を退けさせるのに成功した。事実，リッベントロープは，結局は，ペタンの意志に反したドリオ政府の即時樹立を断念し，ドリオとの会談のときにかれが最初に提示した案を実現することを選んだ。こうして，ペタン元帥が法的に承認するという条件で，「政府委員会」を組織する案が進められることになった。

けれども，その後の事態は，ド・ブリノンの期待通りには，すんなりとは進まなかった。

デアの日記は，つぎのように続けている。「リッベントロープは，ド・ブリノン委員会の構成にたいするペタン元帥の承諾をえようとすることに同意した・・・この間に，ドリオは，ドイツ外務省の2人の役人に支援されて・・・かれの党の再編成に努力するであろう。数週間後には，ペタン元帥はドリオによる組閣を承認するかどうか意見をのべることであろう。そのときまでには，戦況は変化しているであろうが，当然，われわれは，フランスの領土が奪還されるという仮定に立っている。ラヴァルは溝に投げ棄てられた。」シュミット通訳の覚書きも，このデアの日記の記述の正しいことを裏付けている。リッベントロープは，「あらゆる可能な手段によって，ドリオを支持し」，それとともに，ただちに，ペタン元帥にかれがいっさいの政治活動を拒否した8月20日の声明を撤回させ，かれが早急にドリオによって指揮される「革命的な」政府を任命する必要を強調したと，シュミットは書いている[12]。

リッベントロープは，決定された基本構想に全員が同意しているかどうかを確めるために，あらためてド・ブリノンを迎え入れて，長時間会談した。この会談で，ド・ブリノンは，またもや，ドリオにたいする型通りの攻撃を始め，つぎのようにのべて，あらためて，ドリオの「政権掌握」に反対した。「ドイツ政府は大きな幻想にとらわれていて，ドリオがペタン元帥なしでも政権を維持できると考えておられます。しかし，このような解決策は危険な冒険で，結局は，フランスとドイツに不利に働くことになりましょう。そのうえ，ダルナンよりドリオを優先させるのは不当であり，デアもまた，ドリオよりは影響力が大きいのです。また，このことを忘れてはなりませんが，ドリオは，1939年には，もっとも有力な反ドイツ好戦主義者のひとりだったのです。」このド・ブリノンの発言にリッベントロープはひどく腹を立て，反ドリオ・グループを見捨てて，フランス全体をドイツ軍政下に置き，その庇護の下に，ドリオをかれの思い通りに振舞わせることにしようとおもうと脅した。驚いたド・ブリノンはいっさいの抵抗を断念し，会談の終わりには，ドイツ帝国外相の断固とした「命令」に屈服し，かれに要求されたすべて——ド・ブリノンは行政的な性格の暫定的な「政府委員会」を組織し，ペタンを説得して8月20日の声明を撤回させ，ドリオにかれの党の再建に必要なあらゆる便宜を提供し，ド・ブリノン自身とかれの仲間は，い

[11] *Journal de Marcel Déat*, 31 août 1944.

[12] Cit. par D. Wolf, *op. cit.*, pp 401-405, 平瀬・吉田訳, pp.386-390.

ざという時には，ドリオ政府への参加を受諾すること——を受け入れた。

ド・ブリノンら——ドリオ以外の——対独協力派の指導者たちが，ドイツにたいして無抵抗で無気力であったのにくらべて，おそらくドリオだけはかれらとは別の資質の人間であり，ドイツ帝国外相に反抗することができたのは，ドリオひとりであった。しかし，かれら対独協力派の指導者たちのすべては，いまや，フランス国民のほとんどすべてがド・ゴールを支持し，マキに味方していることを知っていた。連合国軍のノルマンディー上陸以後，対独レジスタンス運動は驚くべき勢いで拡大していた。けれども，かれらはドイツの秘密兵器製造による戦況の逆転に期待していた。ドリオ自身もまた，他の対独協力主義者たちと同じく，リッベントロープがほのめかしていた秘密兵器の完成によってドイツが最終的には戦争に勝つことができ，そして，勝ち誇った傭兵隊長として祖国に帰還できることを希望していたのであろう。

9月1日，これらドイツ政府の賓客たちは，「狼の巣穴」と呼ばれた，まるで掩蔽壕のような部屋で，リッベントロープ立ち会いのもとで，ヒトラー総統自身と会見した。写真とくらべて，ヒトラーの顔は太り，背中は曲がり，かれらが予想していたより老けた物腰であったが，いわれていた通り，人を射すくめるような目つきをしていた。ヒトラーは，戦前の独仏関係の回想や現在の状況についての長い独白にふけったあと，「現在の戦争は，いかなる結末になろうと，1946年や1947年には終わらず，ひじょうに長い戦争になり，ヨーロッパが覇権を維持するか，あるいはアジアに降伏するかが決まって終わるだろう」，それに，「ドイツ軍が撤退したところでは，どこでも，ボルシェヴィズムが前進するだろう」とのべた。これに答えて，ド・ブリノンは，多くのフランス国民はヒトラーの偉業を賞賛し，「ヨーロッパ防衛のためのあなたの努力を大いに賛嘆しつつ，あなたについていこうとしています」と確言し，ついで，前日，リッベントロープと話し合って決定した手筈をかいつまんでのべた。けれども，ド・ブリノンは，意識してか無意識でか，ドリオのことを一言もいわなかったので，リッベントロープはただちにド・ブリノンの発言を修正し，フランスの新政府は「ドリオ政権」でなければならないと強調した。しかし，これにたいしては，ヒトラーは，かれがペタンの指揮下でつくられた政府を好むことをあらためて表明した。会見は，訪問者たちそれぞれにたいする総統の友好的な挨拶で終わり，ドリオにたいしては，ヒトラーは，東部戦線でかれが戦功十字章を受けたことを祝福した。

結局，ドリオはすぐには「フランスの総統」として認められはしなかったが，しかし，かれ自身は，政権掌握のための作戦が順調にいっていると考えていたようであった。かれは他の4人とともにベルリンまで鉄道で戻り，そこからビュルケルの飛行機でノイシュタートに帰ってきた。ヴィクトル・バルテレミーによれば，ドリオは「晴れ晴れとした顔」をしていて，党執行部と政治局のメンバーを集めて，ヒトラー総統の司令部を訪れた話をしたという[13]。

フランス人民党が居を定めたノイシュタートの正確な名はノイシュタート・アン・デア・ヴァインシュトラーセ（ワイン街道上の新しい都市）で，住民3万人の小都市であった。ノイシュタートは突然流入してきたフランス人民党の党員とその家族たちの波にのみこまれ，街のいたるところでフランス語が聞かれるようになった。これらの「避難民たち」には食糧配給切符があたえられ，かれらは菓子も腹一杯食べることができたので，一部の住民たちにはねたみの感情を抱かせたとおもわれるが，しかし，全体としては，党員たちは住民のあたたかい歓

[13] V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 428.

迎を受けた。ビュルケル長官の官邸には，ドリオの書記局が収容され，ドリオの「私設秘書」となっていたル・カンがこれを指導していた。党のその他の機関は大きなギムナジウム（高等中学校）の校舎の一棟に設置され，そこには若干の党員とその家族も収容されていた。ドリオの家族（妻，母，2人の娘）は一軒の別荘に住まわされ，サビアーニとその家族が同じ別荘の別の階に住んでいた[14]。これらのノイシュタートの避難民のなかには，ドリオの愛人ジネット・ガルシアもいて，1944年4月には，ドリオの娘を生んでいた。ドリオは，ル・カンに，ひそかに愛人と子供の世話を頼んでいた[15]。

ドリオたちにとっては，ドイツに亡命中のフランス人民党を再編成する必要があった。リッベントロープが，パリのドイツ大使館でタイレン参事官と同様にフランス人民党にきわめて好意的であった，シュトルーフェ参事官をノイシュタートに派遣してきたのにたいして，ドリオは，かれの代理人として，党執行部のメンバーでかれの側近のクリスティアン・ルジュウールをベルリンに送った。ルジュウールは，ドイツの各「大管区」で，入党志願者を募り，党を再編成する許可をえた[16]。こうして，数週間後には，数千人もの党員とシンパの組織をつくることができた。当時，ドイツには，戦争捕虜，自発的にドイツに渡った労働者や強制労働徴用（STO）で徴用された労働者など，200万人以上のフランス人がいたのである。かれらはすべてフランスへの帰国を望んでいたが，フランス人民党は，この集団を党員募集のための「生け簀」として利用できたのであった[17]。

シュタインオルトでの会談後，ドリオはヒトラーがかれにフランス政府再編の任務をあたえたというニュースを広め，戦況はごく近いうちに完全に逆転すると確信して，新内閣を準備するという仕事に没頭した[18]。しかし，やがて，かれはこのような幻想を捨てなければならなかった。

1944年9月初めには，ペタンやラヴァルはフランスを去り，ジグマリンゲン（南西ドイツ，ヴュルテンベルク州，元ホーエンツォレルン・ジグマリゲン公国の首都）への亡命を余儀なくされるのである[19]が，ジグマリンゲンに連れていかれるまえにしばらく居を置いていたベルフォールで，ペタンは会見を拒否していたド・ブリノンから，忠実な側近ベルナール・メネトレル医師を介して，大量の報告書を受け取った。おそらく，そのなかに書かれていた戦争捕虜の問題やドイツで働くフランス人労働者の状態に気持ちを動揺させたのであろう，かれは，メネトレル医師を介して，ド・ブリノンにつぎのようなメッセージを送った。「先月の8月20日，元帥は，国家主席の職務を果たすの

---

14) V. Barthélemy, *ibid*., pp. 426-427; J. Hérold-Paquis, *op. cit*., p. 66 et passim; *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Jean Hérold-Paquis, procès-verbal d'audition du 12 juillet 1945; H. Rousso, *op. cit*., passim.

15) ル・カンとドリオとの親密な関係は，ル・カンにたいする党員たちの無理解とねたみの原因となり，かれを同性愛者でモルヒネ常用者だと主張するものもいた。のちにドリオとフランス人民党の諸機関がノイシュタートから移動しなければならず，ボーデン湖畔のマイナウ島に居を定めたとき，ル・カンはジネットをボーデン湖の向こう岸，ユーバリンゲンに住まわせた。しかし，ドリオの妻と母にはそれを秘密にしなければならず，この数か月間の亡命生活中，ドリオはジネットから引き離されていた。*Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Le Can, document de défense préparé par Le Can et dossier Ginette Garcia, procès-verbal d'audition, le 31 juillet 1945; J.-P. Brunet, *op. cit*., pp. 468-469.

16) J. Hérold- Paquis, *op. cit*., pp. 70-71.

17) H. Rousso, *op. cit*., pp. 295, 315-316, 323, 336, 346-347, 357, 389-391; D. Wolf, *op. cit*., pp 407-408, 平瀬・吉田訳, p. 391; J.-P. Brunet, *op. cit*., p. 470.

18) *Archives Nationales*, W 350, bordereau 1446, dossier Auswartiges Amt, «Hébergemet du gouvernement français», renseignements fournis par le responsable SS de la 6e circonscription de la région Ouest, 7 septembre 1944; J.-P. Brunet, *ibid*., p. 471.

19) 三谷隆信『回顧録』中公文庫，1999年が，日本大使として，フランス政府（正確には，政府委員会）とともにジグマリンゲンに移り，その後の8か月間，この地において経験した生活を証言している。

をやめることを公式に表明されました・・・しかしながら，問題として提起されている事柄がきわめて重要である以上，元帥は，ド・ブリノン氏が，強制的に監禁されている民間人にかんして責任を負っておられる問題にひきつづき取り組まれることに，異議を唱えたりはされません[20]。」このメッセージを受け取って，9月6日，ド・ブリノンは「ドイツにおけるフランスの利益を守るためのフランス政府委員会」を設立し，それがペタン元帥の「合法的な」権限に由来しているかのように装うことによって，亡命中の「真の」フランス政府として機能させようとした。しかし，ベルフォールにいた閣僚たちの大部分は，ド・ブリノン，デア，ダルナン，ブリドゥー将軍（陸軍省政務次官）らに追随して政府委員会にはいるのを拒否した。

ただちにドリオは，最初は口頭で，ついで正式に書面で，以下のような一連の問題をシュトルーフェ参事官に提示し，参事官はそれをベルリンに報告した。すなわち，ペタン元帥は，このフランス政府の性格の変化に正式に同意したのか，なぜポール・マリヨンたちは，政府委員会に参加するのを拒否したのか。「ドイツ政府は，ベルフォールの決定が，ヒトラー総統の司令部で総統にたいしてなされた約束と合致していると考えるでしょうか。ベルフォールでとられた措置は，ヒトラー総統にたいしてフォン・リッベントロープ外相が表明された願望に従った，わたしが指揮しなければならない政府が組織されるまでのあいだの一時的措置とみなされるでしょうか。」これらの質問は，「フランスの総統」になれるのを切に待ち望んでいた瞬間が遠ざかっていくのを感じたドリオの落胆を示すものであったといえよう。シュトルーフェに宛てた手紙のなかで，ドリオは，かれがリッベントロープと取り決めたすべての約束——フランス人民党の指導部と党組織を全面的に再編成すること，党をいつでも行動に移れる状態にし，日刊紙と週刊紙を刊行し，ラジオ放送を滞りなくおこない，マニフェストを出し，党員数をさらに増加させること——を守ったことを強調した。ドリオは，「かれ自身の態度を決める」ことができるように，かれが提示した質問にたいする返答を待っているとのべ，かれが「公然と行動に移れるように」，ドイツ政府の意図をただちに教えてくれるようシュトルーフェに頼んでいる[21]。

リッベントロープがこれらのドリオの質問に答えたかどうかは，不明である。おそらく，返事はこなかったのであろう。それかあらぬか，このあと，ドリオはきわめて活発に行動し，ドイツ高官たちとの接触を増やしていった。9月12日，かれは，ノイシュタートでフランス人民党「全国評議会」を開催し，そこでシュタインオルトでのヒトラーとの会談の話をし，政治および軍事情勢を論じ，翌日の9月13日には，バーデンバーデンで，ヴィクトル・バルテレミー，ローラント・ノゼック（親衛隊政治情報課長），その上司のヴァルター・シェレンベルク（親衛隊第6部長）たちと話し合っている。9月15日には，ドリオは，かれがビュルケルによって紹介されたヒムラーとベルリンで会談したとき，ふたたびシェレンベルクに会っている。ヒムラーとの会談は友好的におこなわれたが，しかし，フランスにおけるフランス人民党の地下活動を組織する件については，ヒムラーはかれの部下，シェレンベルクとカルテンブルンナーに任せた。

9月20日，ドリオはふたたびシュタインオルトにリッベントロープを訪ねたが，2人のあいだに激しい口論が起こった。リッベントロー

[20] Louis Noguères, *Le véritable procès du Maréchal Pétain*, Arthème Fayard, Paris, 1955, pp. 78-79; H. Rousso, *op. cit.*, pp. 108-117.

[21] *Archives Nationales*, W 350, bordereau 1446, dossier Auswartiges Amt, «Hébergemet du gouvernement français», pièces 24 et 25, télégramme de Struve du 9 novembre 1944 et lettre de Doriot à Struve du 9 novembre 1944; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 471-472.

プは，ドリオが，まったくの独断でヒムラーや親衛隊の高官たちと接触した事実，リッベントロープが好ましくおもっていなかったビュルケルとドリオとの関係，ドイツ帝国政府のドリオの遇し方についてシェレンベルクにドリオ自身が表明した批判等を厳しく非難した。ドリオはリッベントロープに反抗し，戦争開始以来，ドイツがフランス人民党にたいしてとってきた政策を批判した。こうして，あれほど都合よく始まったかにみえたリッベントロープとドリオとの協力関係も，結局，ドリオが期待していたようには進展しなかった。「合法的な」政府を樹立するということにたいするペタンの頑ななこだわりがある以上，そして，シュタインオルトの会談で同意されたかにみえた「ドリオ政府」については，ペタンの同意が不可欠であるとドイツ政府が主張する以上，ドリオは，短期間に「革命的な」政府を組織するというかれの計画を延期せざるをえなかった[22]。

さらに，ドリオとフランス人民党にとって手痛い打撃となったのは，その最大の保護者ビュルケルの突然の死（1944 年 9 月 29 日）であった。それは自殺であったのか，ヴィクトル・バルテレミーが書いているように，急性の肝硬変による自然死だったのか，あるいは，サン・ポーリアンが噂を広めたように，殺害されたのであったのか，真相は不明であった[23]。

このビュルケルの死とともに，「フランス人民党の居留地（コロニー）」のよき季節は終わった[24]。その結果，ドリオはフランス人民党の新しい受け入れ先をみつけなければならなかった。ドイツ政府は，フランス人民党をノイシュタートにとどめておこうとはせず，その党員たちと党の諸機関を，他の亡命フランス人たちとともに，ジグマリンゲンに集めようとしていた。しかし，ドリオとしては，かれ自身や党組織がフランス移民の「有毒な」雰囲気と混じり合うのは，そして，とりわけ，「政府委員会」のそばに落ちつくことによって，同委員会を堅固な組織であるかのようにみせるのは，反対であった。そのため，ドリオは言を左右にし，返事を引き延ばし，アベッツにたいしては，治安上の理由から，フランス人民党のラジオ情報部などの諸組織をジグマリンゲンの近くに移すことはできないという，ベルリンのドイツ帝国治安機関の意見を援用した。ドリオはアベッツに，フランス人民党の一部をヴュルテンベルクの小都市（ジグマリンゲン）に住まわせるのをけっして拒否はしないが，しかし，1,000 人以上の党員とその家族をすでに人口過密な区域にどうして住まわせるのか，「あなたがわれわれに宿営地として割り当てるつもりであるシュタウフェンベルク城は，党の必要に適してはいず，それに，象徴的な観点からも，ヒトラー総統の殺害を図った人物の城をフランス人民党の党首の住居に使うのはよろしくないのではありませんか」と書いている（結局，この城に住むことになるのは，ラヴァルである）。そして，ドリオは，この問題の解決のために，シモン・サビアーニとマルセル・マルシャルをジグマリンゲンに派遣し，ド・ブリノン委員会にたいしてドリオの常任の代理人をつとめさせることをアベッツに申し出た[25]。ドリオの 2 人の代理人は，ジグマリンゲンのすぐ近くにある大きな村メンゲンに落ち着き，かれらの使命を履行した。かれらは一軒の店に党の事務所を開設し，そこには入党希望者が押し寄せた[26]。

「政府委員会」については，ドイツ政府は，それが置かれた城に治外法権の地位を認めたものの，すこしも重要視してはいなかった。若干

[22] D. Wolf, *op. cit.*, pp. 408, 411-412, 平瀬・吉田訳, pp. 391-392, 393-394.

[23] V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 433; Saint-Paulien, *Histoire de la collaboration*, L'Esprit nouveau, Paris, 1964, p. 494.

[24] D. Wolf, *op. cit.*, p. 412, 平瀬・吉田訳, pp. 393-394.

[25] *Archives Nationales*, W 350, bordereau 1443, dossier Auswartiges Amt, «Hébergemet du gouvernement français», pièce 28, télégramme d'Abetz au ministre des Affaires étrangères du 29 septembre 1944.

[26] J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 473-474.

の閣僚たちは，自分たちの存在を示そうと躍起になっていたのであろう，たくさんの政令や通達を出し，つまらぬ書類を書きまくった。デアは，かれに付き従ってきたひと握りの国家人民連合の活動家たちを「労働省」の部屋に詰め込み，政府委員会の先頭に立って，それを真の政府に変えるときがくるのを我慢強く待っていた[27]。その他の対独協力主義の指導者たちは，一緒にドイツに連れてきた5,000人から6,000人の民兵を当てにしていたダルナンを除けば，存在しないも同然であったが，デアもダルナンも，いまでは，ドリオにとってもはや危険な競争相手ではなかった[28]。

ドリオは，結局，9月15日にベルリンで会っていたヒムラーの支援を受け，ボーデン湖のほとりの町コンスタンツと橋でつながれた小さな島，マイナウ島にあるスウェーデン王族所有の城とその付属施設に，フランス人民党の指導部と諸機関を置くことができた。ドリオが，「政権につく」ために，かれの党の活動を強化する最後の努力をこころみたのは，このマイナウ島からであった。

2. 最後のたたかい

ノイシュタートで，ドリオは，ドイツ政府の代表たちとのあいだで，政府の宣伝省からは独立した新聞発行とラジオ放送局の設立を目標として，話し合いを始めていたが，具体的なことは，まだ，なにも決まっていなかった。しかし，1944年9月1日，ドリオの忠実な同志で，「ラジオ・パリ」の血気盛んな論客ジャン・エロルド・パキが，ヴュルツブルク近くのバート・メルゲントハイムでフランス語のドイツ放送，「帝国の声」とその他，フラマン語，スペイン語，ポルトガル語の番組を放送していたドイツの放送局を味方につけた。その数日後，ピエール・アントワーヌ・クーストーと，ドリオがフランスの放送機関の局長に任命したばかりのアンドレ・アルギャロンとが，エロルド・パキと合流した。しかし，まもなく，かれらフランス人民党の放送記者たちが，ドイツ政府機関のコントロールや検閲なしに，フランス人民党からの指示だけを受けて放送しようとしたので，スタッフや放送をドイツの政治的，機材的管理に従わせようと考えていた元「ラジオ・パ

---

27) *Archives Nationales*, F[7] 15288, dossier Sigmaringen.

28) ダルナンに連れられてドイツに移住した民兵たちには，しかしながら，いかなる自由もなかった。ダルナンは，かれらがフランス軍の制服を着て，フランスの国旗，フランス軍の司令部の指揮下で戦いを続けるのだといっていた。しかし，かれらが再編成されたウルム（ヴュルテンベルク州）で，ダルナンから，ドイツ軍のなかで戦っているすべてのフランス軍部隊，主としてフランス義勇軍団（LVF）と武装親衛隊（SS）のフランス旅団をひとつにまとめて編成することに決まったシャルルマーニュ旅団に，かれらも配属されるといわれた。*Archives Nationales*, F[7] 15300, dossier Darnand, note des RG en date du 26 août 1944 transmise à la Haute Cour de Justice. かれらがナチス親衛隊（SS）の制服を着て戦い，ヒトラーに忠誠を誓わなければならないと知ったとき，かれらのうちの数百人は反対を表明し，民兵団を離脱しようとした。ダルナンは，シャルルマーニュ旅団に配属されるか，あるいは塩鉱での労働に従事するか，その選択をかれらにまかせた。こうして，約1,800人の民兵隊員がシャルルマーニュ旅団に配属されることになり，同旅団が宿営していたヴィルトフレッケンのキャンプに出発した。かれらは11月5日にキャンプに着いたが，冷淡に迎えられ，フランス義勇軍団（LVF）と武装親衛隊（SS）の隊員たちは，かれらを笑い者にし，侮辱し，迫害した。Jacques Delperrie de Bayac, *Histoire de la milice*, Arthème Fayard, Paris, 1969, pp.576-580.
ダルナンは，ドリオを追い抜くために，シャルルマーニュ旅団を利用しようと考えていた。かれは，「フランスの総統」のポストにつくために，同旅団の「政治的指揮」をとることを承認させたいと願っていた。しかし，ダルナンがヴィルトフレッケンのキャンプに出向いたとき，キャンプの指揮官クルッケンベルク将軍は，かれをそっけなく追い返した。クルッケンベルクは，フランス義勇軍団（LVF）の前任指揮官の教えを守って，新しく編成された旅団に政治的ライヴァル関係を入り込ませまいとしたのであった。結局，ダルナンは「幻影を追って獲物を逃がし」（ジャン・ポール・ブリュネ），かれの部下たちはかれが自分たちを売ったことを非難し，かれを「最後の奴隷商人」と呼んだ。*Archives Nationales*, F[7] 15300, dossier Darnand, note citée supra; J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.475.

リ」局長とかれらとのあいだで，緊張が生じた。しかし，最終的には，1か月に及ぶ白熱した議論とドリオの奔走の結果，1944年10月20日に，「ラジオ祖国」の放送が始まった。

「ラジオ祖国」は，空襲警報や連合国軍の空爆によってしばしば中断を余儀なくされながらも，きわめて反ヴィシー政権的で，「革命的な」，そして強烈に反共的な論調の放送をおこなった。戦後の裁判での証人尋問で，エロルド・パキは，「われわれは，真の愛国者であったフランスのレジスタンス活動家たちに，われわれが偽りのフランスの対独協力主義者たちよりも，かれらに近いことを知らせたのです」と語っている[29]。

もちろん，「ラジオ祖国」の放送は，すでにパリが解放され，ド・ゴールを主席とする臨時政府が成立したフランスの国民たちには，まったく無視されたことであろう。しかし，国外に亡命していたフランス人のあいだでは，その力強い活動，その信念，それが伝えたフランス人民党の政治計画は，政府委員会の広報責任者ジャン・リュシェールに牛耳られていたジグマリンゲンの放送局（「こちらフランス」）より，はるかに広範な聴衆をもったとおもわれる。

ジャン・エロルド・パキは，戦後の裁判で，フランス人民党のラジオ放送がもっぱら党の資金によって運営され，そのさまざまな協力者たちがドリオの密使が時折り運んできた「わずかばかりの金」を分け合っていたことを強調している[30]。ヴィクトル・バルテレミーが想起しているように，フランス人民党は少額の軍資金をドイツに移したようであった。同党の資金は1944年春にはほとんど枯渇してしまっていたが，「しかしながら，マッソン〔フランス人民党経理主任エミール・マッソン〕の倹約のおかげで，党財政は少額の資金を貯めこむことができたのである」とバルテレミーは書いている[31]。

しかし，経理主任が評判の倹約家だったとはいえ，ほとんどなくなってしまった資金からどのようにして倹約をすることができたのであろうか。ドイツ亡命後，フランス人民党の組織全体は，いかなる資金によって機能していたのか。マイナウ島の城の滞在費用や，小間使い，庭師などを含むすべてのドイツ人従業員の給金は，いかなる資金によって支払われていたのであろうか。文書資料がないために，おそらく，ドイツの機関によって多かれ少かれ規則的に支払われた一種の交付金が存在したのではないかと推測せざるをえないが，1944年11月18日に，デアが，その日記のなかで，つぎのように書いている。「わたしは，アベッツに，いったい誰の金でドリオはあちこちでかれの手先たちを養うことができるのか，ドイツの金ではないのかと尋ねた。アベッツは，それはドイツの金であるとほのめかしつつ，わたしの質問に同意した[32]。」

1945年1月には，ドリオは，以前，パリでクロード・ジャンテを編集主幹として発行されていた新聞，『ル・プティ・パリジャン』の復刊をドイツ側に認めさせることに成功した。同紙の編集は以前と同じくクロード・ジャンテにまかされ，日刊紙として，コンスタンツで刊行された。この結果，フランス人民党の宣伝活動は，同紙の発行によって効果的に引き継がれた。ラジオ放送の場合と同じく，ここでも，ジャン・リュシェールがジグマリンゲンで刊行していた生彩のない新聞『ラ・フランス』の「三文記事」が引き立て役を演じた。『ル・プティ・パリジャン』紙は，写真を掲載し，学芸欄，「レジャー」欄，サッカー，ラグビーな

29) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Jean Hérold-Paquis, procès-verbal d'audition du 12 juillet 1945; J, Hérold-Paquis, *op. cit*., pp. 80-83.

30) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Jean Hérold-Paquis, procès-verbal d'audition du 12 juillet 1945.

31) V. Barthélemy, *op. cit*., p. 417.

32) *Journal de Marcel Déat*, 18 novembre 1944.

どのスポーツのニュースのほか，ドイツ語を学ぶ方法まで特集し，これらの「通俗的な」側面は同紙を「大衆化」することに役立った。しかし，その主要記事の多くは，フランスの問題に割かれていた。同紙が詳しく論じたフランス国内の政治情勢の記事——それはドイツ側の情報伝達のプリズムによってゆがめられてはいたが——は，解放後のフランスにおける裁判，暴力による報復，処刑，レジスタンス活動家たちの内部対立などを報じ，それらはすべて，内戦が不可避であり，それが近いことを暗示していた。

ドリオがフランスにおけるフランス人民党の非合法組織を強化する目的で，ドイツの領土に諜報員と破壊活動家を養成する学校を設立しようとしたのは，フランスにおける内戦を予想してのことであった。1944年12月8日，ドイツ帝国全権公使ライネベックが，リッベントロープ宛ての電報のなかで，フランスの情勢にかんするドリオの分析とかれがとろうとしている行動を，つぎのようにのべている——ルーズベルト大統領がド・ゴール将軍からフランスを旅行するよう招待されているが，ドリオは，この旅行が効果的に引き起こされた混乱によって妨害されれば，その結果，ド・ゴールがいかに無能か，また，政府やレジスタンスにたいしても，アメリカの占領にたいしても，フランス人がいかに不満をもっているかがあきらかになろうと考え，このような事態を発生させることに大きな関心を抱いている，さらに，かれは，アメリカ軍の部隊にたいしてテロを企て，それを共産党員のせいにし，同時に，食糧補給制度の欠陥に抗議するキャンペーンをまきおこせば，おそらく，激しい社会的緊張が生じ，共産党はたぶん地下に潜らざるをえず，そのときこそフランス人民党が活動を開始するべきときであろう，といっている[33]——と。ライネベックの言葉通りであったとすれば，ドリオは，パリ解放後のフランス社会について，常規を逸した妄想にふけっていたことになろう。

しかし，ドリオにとっては，解放後のフランスでのフランス人民党の地下活動は，けっして夢物語ではなかった。すでみたように，1944年9月以来，ドリオは，フランスにおけるフランス人民党の非合法活動を強化するために，ヒムラー機関と話し合いを始めていた。シュトルーフェとタイレンが，リッベントロープ外相に宛てたメッセージのなかで，当時，フランスでは，フランス人民党の15の地下放送が機能しているのを確かな事実として示し[34]，あるいはまた，ヒムラー機関が外相に「ドリオの党が，今日，敵によって占領されたフランスの国土で大々的に活動している」と報告している[35]のは，にわかには信じがたいが，しかし，ドリオが，亡命先のドイツで，軍事訓練や情報活動のための学校をいくつもつくり，アルベール・ブーグラに視学総監の資格をあたえて，それらの管理を託したのは，まちがいなく，この目的を達成するためであった。学校はすこしづつ設立され，結局6校になり[36]，あらゆる政治的，軍事的行動の基礎を教える初級学校にくわえて，情報活動（情報収集技術，連絡，伝達，通信の暗号化など），破壊活動（武器や爆発物の知識，軍事的・工業的破壊活動，街頭戦，個人の暗殺），対スパイ活動，非合法政治活動など

33) *Centre de Documentation Juive Contemporaine*, document CXCⅡ-3, télégramme no. 70; H. Rousso, *op. cit.*, pp. 266-268.

34) *Archives Nationales*, W 350, bordereau 1446, pièce 26, télégramme du 9 septembre 1944.

35) *Archives Nationales*, W 350, bordereau 1446, pièce 27, rapport signé Wagner, en date du 16 septembre 1944, à destination des Affaires étrangères.

36) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Beugras, Exposé du Commissaire du gouvernement; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 479-480. Dominique Venner, *Histoire de la collaboration*, Editions Pygmalion／Gérard Watelet, Paris, p. 498によれば，秘密工作員を養成する学校はノイシュトレリッツ，バーデンヴァイラー，ハウゼン，バーデン・バーデン，フライブルク，ゼーホフ，フーバッカー，フリデータールに計8校設立されたという。

を教える学校がつぎつぎにつくられた。

これらの学校の教育は，フランス人民党の幹部かドイツ軍人に任された。規律は厳しく，軍隊的な規則が談話室に掲示され，それに従わなかった生徒は，視学総監（ブーグラ）に通報され，懲戒から強制収容所送りまでの処罰を受けた。食物の配給制はドイツ国民と同じだったが，しかし，肉の配給は3倍であった。初級学校の入学時に，「血の河がフランスに流れるだろうが，それは神聖な大義のためである」と叫んだブーグラの熱狂的で激しい演説は，一部の生徒に不安を引き起こした。しかし，10月末頃にドリオが到来したことが，生徒たちの気持を落ち着かせたようであった。ひとりの生徒の質問にたいして，ドリオは，フランス人民党がフランスでおこなおうとしている革命は数年の準備を必要とするが，しかし，資本主義体制が破綻したいまでは，それはフランスをボルシェヴィズムから守ることのできる唯一の手段であるとの意見を表明した。かれは，また，「フランス解放のために，ドイツの力を頼りにする」ことはできるが，しかし，いかなる場合も，フランス人民党の大義を「ドイツの運命と結びつけるべきではない」と何度も繰り返して生徒たちにのべた[37]。

これらの学校は，工作員をフランスに送ることだけを目的にしていて，戦後の裁判での一証言によれば，受講を終えたがフランスに発つのを拒否した生徒のひとりは，ブーグラによって強制収容所に送られた[38]。しかし，いったい，何人の工作員がフランスに潜入することができたのであろうか。戦後の裁判の若干の尋問調書によれば，300人の工作員が，金とにせの身分証明書をたずさえて，スイス経由でフランスに送られたという。しかし，この300人という数字は，おそらく誇張されているのではないか。ドイツでもフランスでもかれらを取り巻いていた困難を考えれば，フランスに渡った工作員の数はせいぜい数十人であったろう。

幾人かの工作員は，パラシュートでフランス国内に降下できた。1944年秋に，まだ，ドイツ軍が制圧していたいくつかの拠点近くに，何人かが降りたようである[39]。1945年1月8日から9日にかけての夜にも，さらに数人がドイツの飛行機からパラシュートでモンタルジの森（ロワレ県）に降下した。かれらは送信機，金（100万フラン），びら，扇動的な内容の冊子を携行し，ドリオみずから，かれらに，ド・ゴール将軍の政府を動揺させるためにはなんでも——個人テロを含むすべてのことを——するよう，訓令をあたえていた[40]。しかし，まえもっていわれていたのとはちがって，パラシュートの降下地点には，だれも工作員を待っているものはいず，かれらはそこからパリにたどりつき，教えられていた連絡員に接触しようとしたが，待ちかまえていた警察官たちによって捕えられた。このように，フランスと北アフリカに送られた工作員のほとんどすべては，実際には，任務を果たすことができず，大部分は逮捕され，死を免かれたものも重い禁固刑の罰を受けた。かれらのなかにスパイが潜入していたのか，裏切り者がいたのか，いっさいは不明である[41]。

ドイツの土地に亡命したすべての対独協力主義組織のなかで，フランス人民党はもっともしっかり組織され，効果的な活動をおこなった唯一の組織ではあったが，しかし，解放後のフ

37) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Celor, procès-verbal d'audition de Pierre Buisson par le Directeur de la Surveillance du Territoire, le 5 juillet 1945.

38) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Morin.

39) *Archives Nationales*, F^7 15288, dossier Sigmaringen, pièce du Directeur de la Surveillance du Territoire, signée Roger Wybot, pour le Directeur des RG, le 2 juillet 1945.

40) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Beugras, Exposé du Commissaire du gouvernement et audition de Foubert et Ouette.

41) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Beugras. «Note au sujet d'Albert Beugras» de la «Direction des Services de Documentation», le 25 septembre 1945.

ランス国内に工作員を潜入させ，内戦をあおろうとしたドリオたちの努力は，すべて徒労に終わった。

3. ジャック・ドリオの死

1944年11月4日，リッベントロープは，ドリオとの3度目の会談のなかで，「フランス解放委員会Comité français de Libération」を発足させるよう勧告した。フランス解放委員会には対独協力主義政党のすべてが加わり，同委員会は，党派性をまったくもたず，もっとも寛大な精神で，反共産主義と真正の愛国心を鼓舞するドイツとフランス在住のすべてのフランス人を受け入れようとするものであり，「共産党と反共産主義との両派のレジスタンス活動のあいだに楔を打ち込み」，場合によってはド・ゴール派とも合意しあおうとするものであった。しばらくためらったのち，ドリオはそのドイツ側の提案を受け入れた。それは将来のドリオ政府にかれを導く第1段階であり，かれが活動を続けるのは，もはや一政党の党首としてではなく，フランス国内外の反共産主義のすべての同胞に開かれたフランス解放委員会の指導者としてであった。ドリオがフランスにおけるかれの活動をこのように位置づけ，ドイツ敗北後もかれが生き残れる可能性をかいまみようとしたのも，このような未来の予測のなかにおいてであった[42]。

そのすこしのちに，リッベントロープは，かれの忠実な部下ライネベックをマイナウ島に派遣し，数週間後の12月14日には，これまでフランス人民党に反対する政府委員会を支持してきたアベッツを更迭し，これに代えてライネベックをジグマリンゲンの政府委員会のもとに大使として送った。あきらかに，ドイツ外相リッベントロープは，ドリオの時代が到来したと考えたのであった。

そこで，ドリオは大包囲作戦を開始した。12月末頃には，ドイツ側の助けもえて，フランス人民党はジグマリンゲンの政府委員会の宣伝機関に潜入工作をおこない，新聞『ラ・フランス』の編集部と『こちらフランス』の放送局の主要ポストに，党の仲間を配置することに成功した。また，バート・メルゲンハイムに設立された同党のラジオ放送局は，『こちらフランス』の放送電波をしばしば妨害した[43]。さらに，ドリオとその同志たちは，ド・ブリノンを含む数人の重要人物をジグマリンゲンの政府委員会の立場から引き離すことに成功し，かれらはドリオが創設しようとしていたフランス解放委員会に個人の資格で加盟することを公然と表明した。しかし，デアは，その動きを全力で阻止しようとして，ドイツの外交官シュトルーフェやタイレンに「合法的な政府」のライヴァルになる委員会をつくることなどはできないことを指摘し，そして，ドリオの委員会を「フランス解放のための全国宣伝委員会」と称するよう提案した[44]。

ドリオが「フランス解放委員会Comité de la Libération française」の創設を告げたのは，1945年1月6日，「ラジオ祖国」の放送によってであった。1月8日の『ル・プティ・パリジャン』紙に再現されたその放送のなかで，ドリオはレジスタンスの「過ち」と「犯罪」——ドリオの言葉をそのまま引用すれば，「そのために数万人のフランス人が強制収容所で苦しんでいる」——とともに，ドイツ軍が占領していたとき持続していた「平和的な秩序」（これもドリオの言葉そのままである）にたいする共産党員，ド・ゴール派，ユダヤ人の破壊工作を非難したのち，つぎのように語った。「われわれは，ボルシェヴィズムと英米の占領から国土を解放

[42] D. Wolf, *op. cit.*, pp.412-413, 平瀬・吉田訳, pp.394-395; J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.484.

[43] H. Rousso, *op. cit.*, pp.152-153.

[44] *Journal de Marcel Déat*, 26 et 27 décembre 1944, 17 février 1945.

するためにたたかうのである。わが国の独立を取り戻すために・・・統一ヨーロッパのために・・・国家社会主義のために・・・ヨーロッパとアフリカの共同の防衛のために！フランス解放委員会に結集せよ！武器を取れ！・・・永遠のフランス万歳！[45]」

ドリオがかれの委員会のために採用した名称は，ド・ゴールがロンドンでつくりあげた「フランス国民解放委員会Comité Français de Libération Nationale」の名称を意識的に剽窃しつつ，それとは一線を画そうとしたものであった。この時期のド・ゴール同様，ドリオは，自分を，やむをえない状況のために亡命を余儀なくされた愛国的指導者だとおもっていたのであろう。ド・ゴールにとってと同様に，かれの運命は，おそらく一時の困難な時期を経たのち，別の方向に大きく転換すると考えていたのであろう[46]。

ドリオがフランス解放委員会の創設を発表した7週間足らず後の2月22日，『ル・プティ・パリジャン』紙は，「革命的統一が実現。フランス解放委員会への加盟の最初の総括をする同委員会委員長ジャック・ドリオとの会見」という大見出しを掲げ，ジグマリンゲンの政府委員会の解散がきわめて近いことを告げた。同紙の紙面は，「政府委員会委員長フェルナン・ド・ブリノン大使」をはじめとして，フランス解放委員会に加盟した多数の個人と団体の名で埋められていた。団体については，フランス人民党を筆頭として，ドイツに存在していたすべてのフランスの組織の名があげられ，必要とあらば，でっちあげもおこなわれたようであり，こうして，同委員会にはフランス青年人民同盟（フランス人民党青年部）をはじめとして，15ばかりの青年団体が加盟しているとみなされた。新聞では，『ジュ・シュイ・パルトゥー』紙，『プティ・パリジャン』紙だけでなく，ドイツにおけるフランス労働者団体の機関紙『フランスの声』，フランス戦争捕虜の新聞『ル・トレ・デュニオン』，親衛隊「シャルルマーニュ」旅団（ママ）の機関紙『将来』等の不定期刊行紙も加盟していた。

政府委員会委員長ド・ブリノンの加盟は，ドリオにとって，ジグマリンゲンの見かけ倒しの要塞にぽっかり大きな穴を開けたようなものであった。2月20日，ド・ブリノンに送った手紙のなかで，ドリオはつぎのように書いている。「あなたもわたしも，ともに協力することを後悔する必要はないと，わたしは確信しています。われわれは，こうして，きわめて偉大な事業，フランスの再生という事業にわれわれの名前を結びつけることになるでしょう・・・われわれは，こうして実現した団結によって，このような革命的で精力的な力をつくり出すことができ，こうして，あなたは，政府のレヴェルであなた自身が追求してきた政策を強化することができるでしょう[47]。」

しかし，『ル・プティ・パリジャン』紙には，ドリオの呼びかけに応じなかったデアとダルナンの名前はなかった。2人を説得して，フランス解放委員会に加盟させなければならなかった。『プティ・パリジャン』紙とのインタヴューのなかで，ドリオはかれらの慎重な態度を「フランスの現在と将来の利益にとってこのように重要な組織をつくり出そうとするときに感じるきわめて当然なためらい」と呼び，「フランスの革命的勢力の最大部分は，われわれの委員会に合流した。委員会の目的は，これらの勢力のすべてが統合される日にしか達成されないであろう」とつけ加えた。

ドリオがこれまで足を踏み入れたことのな

[45] H. Rousso, *op. cit.*, pp. 152-153.

[46] J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 485.

[47] *Le Petit Parisien*, mercredi 28 mars 1945（おそらく3月26日にジグマリンゲンでド・ブリノンがおこなった演説，その冒頭にドリオに敬意を表し，ドリオの手紙を読み上げている）; *Archives Nationales*, F^7 15288, Dossier Sigmaringen, note des RG «A/s. de la vie politique à Sigmaringen», pp. 19-22.

かったジグマリンゲンについにいく計画を立てたのは，デア，ダルナンとの和解を固めるためであった。かれはデアとは2月22日午前11時に，ジグマリンゲンの政府委員会にたいしてかれの「大使」役をつとめるため，サビアーニとマルセル・マルシャルを「駐在」させていたジグマリンゲン近くの村メンゲンで会う約束をとりつけた。2人は一緒に昼食をとることになっていた。ついで，午後5時に，ジグマリンゲンでダルナンと会う予定であった。デアもダルナンも，原則として，フランス解放委員会への加盟を承諾しているようであったが，しかし，かれらはいくつかの保証を要求していた。ドリオは，かれらの自尊心を傷つけないように配慮し，かれらが委員会への加盟をはっきり決めたときには，ほとんど，かれらの望み通りにしようとおもっていた[48]。

この2月22日は，数日まえから，太陽がマイナウ島とボーデン湖のうえに光り輝き，例年より春の訪れが早いことを告げていた。亡命初期の厳しい耐乏生活でドリオの体重は10キロ減少していたが，その後，マイナウ島での生活は好転したいた。アルコール，高級ワイン，手に入れにくい食品など，不足しているものはなかった。イタリアから極上の食料を積んだトラックが，規則的に到着していた。しかし，ガソリンだけは足らなかった。午前10時半頃，ドリオの運転手がかれの車，シトロエンのガソリンが切れているのを知らせてきた。ジャン・ル・カンは，おそらくなにか虫の知らせを感じたのであろうか，「メンゲンにはいかないほうがよい。いずれにしても，デアはこないでしょう」とドリオにいった。しかし，ドリオはメンゲンにいく考えを捨てず，マイナウ島に滞在していたシュトルーフェ参事官に電話して，事情を説明し，かれの車のメルセデスを貸してくれるよう頼んだ。シュトルーフェはかれの車がガス発生器で動く旧型車で最良とはいえないといったが，ドリオは「とにかく，どうしてもメンゲンにいかなければならない」と答えた。こうして，ドリオはメルセデスとドイツ人運転手を借りることになった。ドリオは，ドイツ人運転手のそばの前の席に座り，後部には，ドリオの秘書らしいひとりの女性のほかに，個人的な理由でメンゲンにいきたいとおもっていた，フランス解放委員会の秘書らしい女性とが席についていた。

午前9時30分頃には，ボーデン湖畔の町コンスタンツのサイレンが鳴り，空襲警報が発令されていたが，いつものことであった。「1週間まえから，連合国軍の飛行機がうろつき，機銃掃射をしたり，爆撃したりしていた。飛行機がこの地域の上空をしつこく飛んでいたのは，おそらく連合国軍がバーゼルの北でライン川を渡っているからだとおもわれた。その前日にも，いくつもの鉄道の駅が攻撃された」と，当日，マイナウ島にいたサン・ポーリアンの証言にもとづいて，エロルド・パキが書いている[49]。アメリカ空軍の重爆撃機B17数千機が，ドイツの工業中心地や主要都市を爆撃するために，この地域の上空を飛んでいくあいだ，連合国軍の戦闘機がその飛行ルートを露払いしようとしていたのであった。

ドリオにメンゲンにいくのを思いとどまらせるのは，むずかしかった。かれが出発したのは午前11時15分であり，まだ空襲警報は解除されていなかったが，すでに約束の時刻より遅れていた。デアは午前11時にかれを待っていたのであり，メンゲンまでの距離は70キロメートル以上あった。ドリオを乗せたメルセデスは湖をまたぐ歩道橋のうえをゆっくりと渡り，常連の仲間たちがかれを見送るために集まっていた。天気はうららかであった。

48) *Archives Nationales*, F^{7} 15288, Dossier Sigmaringen; J. Hérold-Paquis, *op. cit*., p. 57.

49) J. Hérold-Paquis, *ibid*.,p. 108.

車がメンゲンの手前数キロメートルまできたとき，農夫たちが数機の飛行機が車の上空を旋回していると合図した。ドイツ空軍の飛行場がすぐ近くにあったので，運転手はドイツの飛行機だと信じて，車を走らせつづけた。突然，2機の飛行機が車に襲いかかったのは，メンゲンから数百メートル手前のところであった。最初の機銃掃射がドリオの両腿に命中した。車が速度をゆるめているあいだ，かれは外へ出ようとして，ドアをつかんだ。2機目の飛行機の発射した機銃掃射がかれの左眼を突き破り，頬とあごを打ち砕き，肺を引き裂き，心臓と肝臓を貫通した。弾丸を浴びて穴だらけになった車は道路のわきの溝のなかにひっくり返って止まり，その間に飛行機は遠ざかった。

運転手も足に重傷を負ったが，しかし，奇跡的にもドリオの秘書は無傷だった。彼女から電話で知らせを受けたデア，サビアーニ，マルシャルが現場にかけつけ，悲鳴をあげ，わめき，狂乱した。女性秘書はかれらに「党首が！党首が！」と叫び声をあげたあと，気を失った。ドリオの友人たちが村の入口に止まっていた車のそばまでやってきたとき，車のなかはぞっとするような光景を呈していた。「ジャック・ドリオの顔は見分けられないほどに破壊され，足は体からほとんど切り離され，胸部は大きく穴を開けられ，かれの手はやっと開けられた――しかし，遅すぎた――ドアをつかんでいた。その夜のうちにも，遺体を柩に入れなければならなかった」（ジャン・エロルド・パキ[50]）。ドリオの遺体は柩に入れられ，マルセル・デアとの会談のために指定されていたメンゲンのホテルの一室に運ばれた。

葬儀は，2月25日，日曜，メンゲンでおこなわれた。儀式は村役場の大広間で始まり，フランス人民党の首脳部全員が集まった。フランス人民党執行部と政治局の名において，マルセル・マルシャルが，感きわまった声で，ドリオの政治的生涯をほめたたえる弔辞を読んだ。ついで，ド・ブリノンが，ドリオの対独協力を称賛したのち，言葉すくなくではあったが，「フランス解放委員会の同志たち」に行動への呼びかけをおこなった。

さらに，ヒトラーの名において，ライネベックが，仏独和解のために，そしてボルシェヴィズムの危険とたたかうヨーロッパの行動のなかで，故人が果たした役割をたたえる弔意の言葉をのべた。空襲警報が鳴り，上空を通過する連合国軍の爆撃機が村役場の建物全体を振動させ，照明が揺れるあいだ，フランス人，ドイツ人の集団がつぎつぎと入場し，前者は十字を切り，後者は直立し，腕を差し出して敬礼した。最後に，サビアーニがつぎのような誓いの言葉をのべ，政治局のすべてのメンバーがつぎつぎとそれを繰り返した。「人民と祖国の名において，わたしは，人民的，社会主義的な国民革命のための，そして，真のフランス解放のためのたたかいのなかで倒れたフランス人民党の党首，ジャック・ドリオに忠誠を誓います。わたしにとっては，かれはいまも生きて行動している党首であり，その党首とともに，われわれのたたかいのために，至高の犠牲にまでわたしの力のすべてを捧げることを誓います。わたしは，かれが，われわれの先頭に立って，わが祖国フランスに，その解放の日に帰還できるように，全力を尽くすことを誓います[51]。」

墓地では，教会の弔鐘が鳴りつづくあいだ，ドリオの遺体を入れた柩が土中に埋められ，教禱（葬儀ミサのあとに柩の周りでおこなわれる祈り）のあと，マルセル・マルシャルが柩のうえに一握りのフランスの土を投じた。その間，涙にくれたドリオの家族は，列席者たちからの弔意を受けていた。墓地の入口では，ヒトラー・ユーゲントが整列して立っていた。フラ

[50] J. Hérold-Paquis, *ibid*.,p.109; *Journal de Marcel Déat*, 22 février 1945.

[51] *Le Petit Parisien*, lundi 26 février 1945.

ンス衛兵隊のらっぱが鳴りひびいて，死者への賛美を表明した。

しかし，党首の柩の囲りに集まったこれらの列席者たちのなかには，かれら自身の運命をも嘆き，かれらがたどってきた道がようやく終わり，ドリオの死とともにフランス人民党も死んだことを自覚しない者はほとんどいなかったであろう。そして，ドイツの敗北によって戦争が終わり，ドリオが国家反逆罪で告発され，その結果，銃殺隊の弾丸によって処刑される運命に遭うことなく生涯を終えるという幸運にめぐまれた，と突然おもい始めたものも，おそらく何人かはいたのではなかろうか[52]。

その後，対独協力者を裁く戦後の裁判で，ドリオの名誉を回復するために，かれの最後を偽りの観点から描き出そうとする試みがおこなわれた。そして，ドリオは，その死の直前にドイツの大義を捨て，連合国の大義に改宗し，反共愛国主義の旗の下に集結するために，フランス軍の指導者たちと交渉を開始したと主張された。このドリオの「裏切り」を知ったドイツの諸機関が，かれの殺害を決意したのであり，1945 年 2 月 22 日に，かれを乗せた車に機銃掃射を浴びせた飛行機はドイツの飛行機だったというのである。

このような主張の発端にあったのは，おそらくアルベール・ブーグラの行動であったとおもわれる。ブーグラがその娘マリー・シェックスにした話によれば，1944 年 7 月 14 日，ドリオはブーグラに「われわれは間違えたのではないか」といい，9 月には，かれが「あまりにも遠くまで来てしまったので，終わりまでいかないわけにはいかない」と告白したという。さらに，ドリオの死の前日の 1945 年 2 月 21 日には，かれはドイツの敗北を疑うことのできない事実とみなし，そして，やがて，アングロサクソンが，「ボルシェヴィキたちをわれわれの国境の外に押し返すために，われわれに味方して」，スターリンに敵対するであろうと予想し，「フランスのなかの共産主義者でないすべてのものたちと合流できるには，柔軟で慎重な政策」を進める必要があると話したという。たしかに，ブーグラ自身は，戦争末期，ドイツ軍の動きにかんする情報を伝えることによって，連合国軍を手助けしたことで知られている。しかし，それはドリオの死後にすぎず，1945 年 4 月末のことであった[53]。ブーグラがドリオの死をめぐる「伝説」をつくりだそうとしたのは，かれ自身の政治的豹変の日付を実際より以前にさかのぼらせ，それをドリオの「愛国的改宗」によって補強しようとする意図からであったのではないだろうか[54]。

ドリオの乗った車を機銃掃射した飛行機の国籍については，ブーグラが，アメリカ軍の対敵諜報活動機関に，1945 年 2 月 22 日にメンゲン地区上空で，連合国軍の飛行機が機銃掃射したことがなかったか調査するよう要求し，それにたいしては，いかなる連合国軍の戦闘機も，2 月 22 日当日，コンスタンツ＝メンゲン＝ジグマリゲン領域上空を飛行してはいないとの回答をえたとされている[55]。しかし，この回答は，当日，コンスタンツでは空襲警報のサイレンが鳴ったという事実と矛盾しているようにおもわ

52) J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 487 - 489 ; Philippe Bourdel, *La grande débâcle de la collaboration 1944-1948*, Le cherche midi, Paris, 2007, pp. 201 - 204.

53) Marie Chaix, *Les lauriers du lac de Constance. Chronique d'une collaboration*, Editions du Seuil, Paris, 1974, pp. 85, 101, 116.

54) ドリオの「政治的改宗」を主張するアルベール・ブーグラの証言は，いずれにしても，ドリオの政治行動原理全体のなかでもっとも重要であったのが，反共産主義であったことを示している。一方，フィリップ・ビュランは，「共産主義にたいする元共産党員の復讐は…ドリオに，その実現を可能にできるものなら，だれにたいしても一身を捧げさせた」と書いている。Philippe Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery 1939-1945*, Editions du Seuil, 1986, pp. 445 - 446.

55) M. Chaix. *op. cit.*, p. 118.

れる。空襲警報は，正確にいえば，午前9時39分より11時32分まで続いたのである。また，ブーグラが連合国軍にいくらか役立つことをしたとはいえ，はたしてアメリカ軍の防諜機関が戦略上最重要な情報を（当時獄中にあったはずのブーグラに）知らせただろうかという疑問が残ろう[56]。

また，サン・ポーリアンも，1964年に公刊したその著書『対独協力の歴史[57]』のなかで，ドリオの車を襲った飛行機の国籍の問題を論じて，車に同乗していた女性秘書がドリオの友人たちに話したところによれば，運転手もドリオ自身も，飛行機をみつけたあと，それらがドイツ軍の飛行機だと認めたと書いていて，「われわれを当惑させるのは，フランス軍当局も，イギリス軍当局も，そしてアメリカ軍当局も，ジャック・ドリオを殺そうとは望まなかったし，いかなる飛行機の搭乗員にも，いかなる飛行士にも，ジャック・ドリオを殺せと命令したことはなかったということである。このような搭乗員を発見するための活発な調査がおこなわれたが・・・しかし，このような搭乗員はみつからなかった」と書き加え，ドリオの死の状況は，すくなくとも謎めいていたと結論している[58]。しかしながら，混乱した状況のなかでドリオの友人たちが女性秘書から聞いたという証言と同様，このサン・ポーリアンの主張も，ただちには受け入れがたいとおもわれる。

実際，ドリオの死に続いた数週間，ドリオはル・カンが金で買収したフランス人民党のメンバーによって，あるいはまた，サビアーニの手先の殺し屋によって殺害されたというような，突拍子もない噂が流れた[59]。しかし，ドイツの機関によって暗殺されたという噂が立ったことはなかった。ドリオの死を告げた2月24日，土曜日の『ル・プティ・パリジャン』紙は，「英米の飛行機によって機銃掃射を受け殺害された」との見出しをつけ，同紙が掲載した「フランス人民党政治局の声明」も，ドリオは「昼前に2度にわたって，英米の飛行機の機銃掃射を受けた」とのべていた。2月26日の『ル・プティ・パリジャン』紙は，ドリオの葬儀に言及したさい，ドリオは，「急降下してかれの車を攻撃した2機の英米の飛行機の弾丸によって殺害された」と書き，他方，ジグマリンゲンの政府委員会系の新聞『ラ・フランス』は，ドリオは「英米帝国主義とボルシェヴィズムのテロリストの飛行士たちによって殺害された」と報じた[60]。

ヴィクトル・バルテレミーは，ブーグラやサン・ポーリアンとはちがって，ドリオの政治的な名誉回復をとくに追求しようとはせず，「ドリオの死後，わたしがマイナウ島で過した2週間のあいだ，だれからも，この主張〔ドリオがドイツ人によって殺害されたという主張〕を支持していると聞いたことがなかった。この主張は後になって生まれたのであり・・・このように事実に異説を立てることによって・・・同志たちは対独協力政策におけるフランス人民党の責任を，したがって，また，かれらの責任を軽減しようとしたのだ」と書いている[61]。これらのことから判断して，1945年2月22日にドリオを殺害したのは，ドイツ軍の飛行機よりも，おそらく連合国軍の飛行機であったという可能

56) ドリオの殺害にはドイツ側の介入があったとの解釈をとるために，アルベール・ブーグラが論拠とした諸事実については，Ph. Bourdel, *op. cit.*, pp.205-206.

57) Saint-Paulien, *Histoire de la collaboration*, L'Esprit nouveau, Paris, 1964.

58) Saint-Paulien, *ibid.*, pp.508-510. 長谷川公昭『ファシスト群像』中公新書，1982, p.58がドリオの車を襲った飛行機の国籍問題を論じているのは，ドリオの名誉回復の立場からではないが，ドリオが連合国軍の飛行機の機銃掃射で殺されたという説を否定したうえ，だれがドリオを射殺したかは今日なおあきらかではないと結論している。

59) *Archives Nationales*, F^7 15288, dossier Sigmaringen, audition de Le Guennec de Kerigant et pièce de la Sureté nationale du 29 mai 1945, intitulée «Quelques précisions sur les collaborateurs français en Allemagne».

60) J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.490-491.

61) V. Barthélemy, *op. cit.*, p.469.

性のほうが大きいようにおもわれる。

しかし，ドリオの存在が目ざわりであったドイツ政府のなんらかの機関がドリオを殺害しようとしていたか，あるいは，ドリオがナチスのさまざまな圧力グループのあいだの争いの犠牲となった[62]という可能性も全面的に否定することはできない。では，いったい，いかなるドイツの機関がドリオを殺したほうがいい，と考えたのであろうか。ヒムラーとナチス親衛隊（SS）がドリオ殺害の張本人であり，ドリオが親衛隊（SS）のフランス人部隊を西部戦線で使用することに断固として反対して以来（サン・ポーリアン[63]），また，かれがフランス人民党の党員を軍事的任務のために提供することを拒否したために（マリー・シェックス[64]），かれらはドリオの死を望んだのではないかというのである。

しかし，このような解釈が生まれたのは，戦後，フランスで投獄されたドリオの部下たちが法廷での弁明を準備していたときであり，かれらは，亡命先のドイツでの自分たちの行動を美化しようとして，フランス人民党の親西欧的転換について大いに弁じたがったのであろう。そして，このような弁明に完全に合致したのが，ドイツの大義を捨て，連合国の大義に改宗したために，親衛隊保安部（SD），あるいはなんらかのドイツ政府の機関によって抹殺された党首のイメージであった[65]。

「死とは生を運命に変えるものである」とは，たしかアンドレ・マルローの言葉ではなかったか。この言葉に則していうならば，ドリオの運命はずっと以前から決まっていたといえよう。1941 年の春以来——すなわち，かつて，かれは自身の経験にもとづいた称賛すべき分析力をもち，共産党指導部やコミンテルンとたたかったが，かれが証明したそのみずからの分析力を捨てさり，かれの情熱，かれの妄想，かれのイデオロギーに合わせて，ひとつの世界，ドイツ的世界を構築しはじめたとき以来——，かれの運命は決定していた。最後まで，これらの情熱，妄想，イデオロギーを失うまいとするかのように，ドリオは疑惑を受けつけようとはしなかった。かれの死の直前にも，「ドリオは 1940 年の選択を後悔してはいなかった。かれは，そのとき間違ったとは考えていなかった。そして，もし，この革命の指導者とかれが信じていた人びとが間違っていたとしても，かれはなお希望をもちつづけたことであろう。いずれにしても，かれはこのように行動したのである」とヴィクトル・バルテレミーは書いている[66]。

戦後の裁判で，フランス人民党の幹部たちは，どのような刑を受けたのであろうか。マルセル・マルシャル，ピエール・デュティユール，ピエール・アントワーヌ・クーストーは死刑を宣告されたが，しかし，恩赦をあたえられた。欠席裁判を受けたシモン・サビアーニ，モーリス・イヴァン・シキャール（サン・ポーリアン）も同様であった。ジャン・エロルド・パキだけが死刑を執行された（1945 年 10 月 11 日）。アルベール・ブーグラは，最後の政治的豹変によって，死刑を免れ，終身刑を宣告された。クリスチャン・ルジュウール，クロード・ジャンテ，ジャン・フォサーティは 7 年の懲役刑，ジュール・トゥーラードは 5 年の懲役刑を受けた。その他のものはもっと幸運にめぐまれ，党の経理主任であったエミール・マッソンは 3 年の禁固刑しか受けず，ヴィクトル・バルテレミーは，しばらくのあいだ捜査の手を免れたあと，軍法会議に召喚されたが，数年間の禁

62) Serge Berstein et Pierre Milza, *Dictionnaire historique des fascismes et du nazisme*, Editions Complexe, Bruxelle, 1992, p. 214.
63) Saint-Paulien, *op. cit.*, pp. 499-501.
64) M. Chaix, *op. cit.*, p. 115.
65) D. Wolf, *op. cit.*, p. 415, 平瀬・吉田訳, pp. 405-406; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 492-493.
66) V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 475.

固刑だけで切り抜けた。

裁判はけっして公平ではなかった。起訴状が同じであるにもかかわらず，1945年か1946年に裁かれた対独協力者たちには，他の時期よりはるかに重い刑罰が課せられた。対独協力者裁判法廷（1944-1948年の特別裁判所）の部の違い，あるいは弁護の巧拙によって，刑の重さは大きく変わった。ドリオの女友達であったジネット・ガルシアは，フランス人民党の制服を着て，びらを撒いただけであったにもかかわらず，1945年10月には，非国民罪を宣告され，1年間の禁固刑に処せられ，市民権を剥奪された。とりわけ，ドリオとフランス人民党の裁判は，予審にも付されず，まったく弁護人もつけられず，あまりにも多くの安易で，まことしやかな，偽りの証言が採用され，戦争中のフランス人民党の現実にたいしては，きわめて不十分な光しかあてられなかった。

有罪の判決を受けたフランス人民党の幹部の多くは，1951年1月5日の大赦法の恩恵に浴し，他は1953年に自由を取り戻した。しかし，だれもが，自分が道を間違えたことを認めようとはしなかった。戦後長く，一年に一度，ドリオを記念するためのミサが忠実な部下マルセル・マルシャルの指導のもとにおこなわれ，フランス人民党の忠実な党員たちを集めた。それは，逆境のなかでの，かれらの「党首」であったものにたいする，死を越えた驚くべき忠誠であった。

ドリオの葬儀から3か月後，ドイツを占領したフランス軍部隊の兵士たちは，メンゲンでドリオの墓を発見した。かれらはそれを踏みつけたうえ，放尿というきわめていやしいやり方で汚した[67]。ドリオはいまもメンゲンの墓地に眠っている。

[67] D. Wolf, *op. cit.*, pp.417-418, 平瀬・吉田訳, p.396.

4. 不条理な偏流

両大戦間フランスの政治的転向者すべてのなかで，ジャック・ドリオはもっとも有名な，しかし，もっとも謎めいた人物である。このフランス共産党のもっとも著名な活動家のひとりであった人物が，いったい，いかなる心理的，政治的転換によってファシストになったのか，これまで，その行程をたどってきた。

フランス共産党の著名な指導的人物であり，「赤い都市」サン・ドニの市長で下院議員となったドリオは，共産党書記長のポストにつくことはなかったが，その率直さ，並はずれた体格と勇気，リーダーとしての器を備えた統率力によって，党内で絶大な人気を獲得してきた。

1928年以来，ドリオは，党の集会では，党の規律を尊重しながらも，他方で，誰よりも早く，社会党を極右よりもはるかに危険な敵とみなして「社会ファシスト」と非難するよう，フランス共産党に厳命したモスクワの指令に疑いの目を向けるようになった。そして，すべての左翼の人間がファシストの脅威を感じた，1934年2月6日の極右諸同盟による下院襲撃事件のときには，かれは共産党の戦術転換を座して待つことができず，ひとりで溝を飛び越える決断をし，共産党とコミンテルンにたいする反逆の先頭に立った。この結果，1934年6月，ドリオは共産党から除名されたが，共産党がそれまでドリオによってつよく主張されつづけてきた戦術をついに正式に採用したまさにそのときに，かれは除名されたのであった。

その2年後，人民戦線が政権を掌握し，フランスが左翼と右翼に引き裂かれた1936年6月，ドリオはフランス人民党を結成した。それはフランスで最初にして唯一の，真の大衆的なファシスト政党であった。

第2次世界大戦の開始とフランスの軍事的崩壊の結果，ドイツとのあいだで休戦協定が調印

され，フランスがドイツ軍の占領下に置かれて以後，とくにドイツの対ソ宣戦布告後，ドリオは対独協力のもっとも熱烈な支持者となった。共産主義にたいする本能的で根深い憎悪は，ドリオに反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団（LVF）の創設者のひとりにならせ，かれは，同義勇軍団の一員として，ドイツ国防軍の制服を着て東部戦線で戦った。

1944年6月6日，連合国軍がノルマンディーに上陸し，8月初めには戦況が日ましに悪化し，パリが連合国軍の射程距離内にはいった8月中旬，フランス人民党の幹部や党活動に専念していた党員たちとその家族は，ドイツに亡命し，最終的には，スイス国境近くバーデン地方のボーデン湖畔に居を定めた。

ドリオとその仲間たちは，共産党がフランスの政権を奪い取ろうとして，内戦が起こった結果，フランス人民党やすべての反共産主義者が，最後には，同じ陣営に結束すると確信していた。そのため，ドリオは，フランス内外の反共産主義のすべての同胞が加盟した「フランス解放委員会」の発足を宣言した。そして，デアとダルナンに加盟を要請するために，フランスの政府委員会が置かれていたジグマリンゲン近くの村メンゲンに向かう途中，ドリオの乗った車は2機の飛行機からはげしい機銃掃射を受け，左眼を突き破られ，肺を引き裂かれ，心臓と肝臓を貫通されて，ドリオは即死した。

しかし，それはなんという異常な行程であったろう。それを理解するためには，その軌道を貫いて全体を結ぶ赤い糸をみつけだすことが必要な，異常な行程であった。

ドリオの生涯は，個人の歴史を大きくはみ出すものである。ドリオはひとりではなく，小集団の頭でもなかった。数万の共産党員と元共産党員がかれの反逆のあとを追って，フランス人民党に入党し，そのうちの多くは，かれとともに，対独協力の冒険に身を投じた。1920年代から第2次世界大戦終結にいたるまで，ドリオと無関係な出来事はなかった。かれはこの時代の事件の中心で生き，すべての重要な問題——労働者の悲惨な生活と労働，失業，1914 − 1918年の大戦，ヴェルサイユ条約，植民地支配，軍国主義——について語り，それらに働きかけた。こうして，ドリオの政治的偏流はひとつの時代全体の深い意味について考えさせ，共産主義と1920年代から1930年代にかけてのその驚くばかりのセクト的形態，さらにはファシズムについての思索と検討にわれわれを引きずり込むものであった。ドリオの生涯を追うことを通して，再考しなければならないのは，かれとわれわれが生きてきた時代の全体である。

ジャック・ドリオが生きたのは，悲劇的な時代の歴史である。それは戦争に備え，戦争を起こし，その傷を癒そうとして癒せなかった時代の歴史である。この無情で容赦のない世界にたいして，われわれに先立つ数世代の人びとが，あらゆる打開策とあらゆるイデオロギーを試そうとした。この時代の歴史が，現代を生きるわれわれにとっても，とりわけ教訓に富んでいるとおもわれるのは，おそらく，そのためであろう。

ドリオは，共産主義からファシズムへ移ることによって，ひとつのイデオロギーへの依存から他のイデオロギーへの依存へと陥ったといえよう。しかし，ドリオの人間的素質，かれの知性，勇気，情緒的きらめき，政治家としての才能を想い起こすならば，このドリオの共産主義からファシズムへの移行は，そして，その過程でかれが遭遇した数々の難局と混乱の光景は，いっそう耐えがたいものとしてわれわれの目に映じよう。われわれが追跡し説明しなければならないのは，この目もくらむような不条理な偏流である。

Les derniers jours du Parti populaire français

Yukiharu Takeoka

Réfugiés en Allemagne, Jacques Doriot et les membres de son parti se sont établis à la petite ville de Neustadt, chef-lieu du Palatinat, grâce à la bienveillance de son ami le gauleiter Bürckel. Mais en conséquence de la mort survenue de Bürckel, le PPF a été obligé à installer sa direction et ses services centraux au bord du lac Constance, dans la petite île de Mainau.

D'autre part, le gouverment français a été emmené par les Allemande à Belfort et Pétain a déclaré qu'il cessait d'exercer ses fonctions de chef de l'Etat. Fernand de Brinon créa donc la délégation gouvernementale française pour la défense des intérêts français en Allemagne. Elle est emmenée finalement à Sigmaringen la petite ville de Würtemberg.

Le 6 janvier 1945, au discours de la «Radio -Patrie», Doriot annonça la création du Comité de la Libératin française, qui accueillerait dans l'esprit le plus large tous les Français d'Allemagne et de France qu'animeraient l'anticommunisme et un nationalisme authentique. De Brinon, président de la commission gouvernementale, a donné son adhésion. Mais il restait à convaincre Déat et Darnand à adhérer au Comité.

Le 22 février, Doriot avait pris rendez-vous avec Déat à Mengen près de Sigmaringen. C'est à quelques centaines de mètres que la voiture de Doriot fut attaquée par les rafales de deux avions vraisemblablement britanniques. Les rafales atleignirent Doriot aux cuisse, lui déchirèrent un poumon, perforèrent le cœur et la foie. Doriot est tué sur coup. Sa dépouille est inhumée au cimetière de Mengen.

Classification JEL: N44
Mots-clés: Sigmaringen, Mengen, Comité de la Libération française